



—中嶋 嶺雄—

リレーコラム

南カリフォルニアにはもう夏の陽光がそそいでいる。二月下旬に本務校(東大)の学位論文審査などのため一時帰国した前後に体調を崩し、一カ月余の入院・手術を経てサンディエゴに戻って来たためか、一点の曇りもなく晴れたる青空のもと、枝ぶりの良い樹木の先端に濃い朱色の大輪の花をちりばめた珊瑚樹(コーラル・トゥリー)が映える風景はいささか眩しすぎる。

今日四月十七日は土曜日で休日。病みあがりの私の健康管理に来てくれている次女が帰国するので、朝早くに空港へ見送ってから新聞スタンドで『タイム』と『U・S・ニュー

ズ・アンド・ワールド・リポート』の二誌を買った。いずれも表紙に「ロサンゼルスー天使の都市が地獄へ行く?」(LOS ANGELES: Is the City of Angels Heading to Hell?)、「キャンパスでの人種(Race on Campus)」と今週のカバー・ストーリーがそれぞれイラストされているのが目についたからである。



私の住むテラスに戻ってテレビをつける。CNNのヘッドライン・ニュースは「分かれた判決(The Split Verdict)」と題し、ロサンゼルス黒人殴打事件の連邦地裁による表決結果を、興奮したアナウンサーの声で伝えている。黒人青年を不当に殴打した四人の警官のうち主犯の二人は、公民権侵害で有罪との判決が伝わった瞬間の黒人たちの歓喜の表情、社会正義が実現したという黒人指導者の見解、アメリカの司法制度は健全だという識者の声、表決に満足の意を表する黒人のブラッドレー・ロサンゼルス市長やクリントン米大統領の言葉などが次々と画面を走る。

だが、こうした表決支持一色のテレビを見ながら、私は逆に、アメリカ社会の深刻なデレンマをより一層強く感じざるを得なかった。つまり社会の正論ないしは公論としては、いまや人種差別が世をあげて排斥されているのに、アメリカの人種問題、とくに黒人問題はますます深刻化していることを実際に否定できないからである。それゆえ、今回の表決は「政治的判決である」との声が一部

に出ていたように、もしも連邦地裁が有罪判決を下さなかったら、ロサンゼルスは死者五十数人を出した昨年四月の暴動以上の騒乱に陥り、やがて全米の主要都市にそれが広がったかもしれない。

たデズニー・ランドなどが散在することは、フリーウェイ網が四通八達したこの都市を一種の「ドライブ・イン・シティ」として発展させ、土地の狭いニューヨークが摩天楼によって高く伸びたのとは対照的に、広大な平野を次々に都市化していた。その意味ではロサンゼルスこそ、最もアメリカ的な近代都市

### 苦悶するロサンゼルス

つ全米第二の大都市ロサンゼルスは、『タイム』が指摘しているように、人種摩擦の「癒えない傷」に悩んでいるのだが、過去数十年間は、アメリカン・ドリームの実る場所、光り輝く明日の都市であり輝く明日の都市であった。銀幕のスターたちのハリウッド、夢をかなえた人びとの豪邸が並ぶバリー・ヒルズ、それにアメリカにしか出来ないと思われ

は、いまやニューヨークのハリウッド同様の黒人社会となり、白人たちはほとんど寄りつかず、街頭にはホームレスの黒人たちが溢れている。アメリカ史をひもとけば明らかのように、もともとカリフォルニアはゴールド・ラッシュにありつこうとした中西部や一部東部からあり、それにメキシコから北上したラティノースたちが合流して出来上がった社会であるだけに、人種的偏見が最も少ない州であった。だから、カリフォルニアで大成功をとげた一つあった日本人移民を一九二四年の排日移民法で排斥し、第二次大戦中には日系米人を戦時収容所へ収容したことを例外とすれば、ゴールド・ラッシュや大陸横断鉄道建設の時期に中国から「苦力(クーリー)」として入ってきた中国人、最近で

は大量のヴェトナム難民や急増の最も著しい韓国人らのアジア系とも共存出来る平等社会だったのである。ところが最近のロサンゼルスに見られるように、いわゆる人種的棲み分け(segregation)が進み、それは、『U・S・ニューズ・アンド・ワールド・リポート』が詳しく報じているように、学校や大学でもより一層顕著になってきている。私がいま教えているUCSDはカリフォルニア大学のなかでも最も黒人が少ないキャンパスだといえようが、つい先日、大学院に在籍していた数少ない黒人学生の一人が辞めていった。彼にとっては、この明るいキャンパスのところで、自分の居場所がまったくなかったのである。(カリフォルニア大学サンディエゴ校大学院客員教授 松本市出身)